



小説

原題・向彩虹飛翔

林彪事件

夏之炎

52、11/3 同刊文庫

1971年9月13日未明、

モンゴルの国境付近に飛行機が墜落。

焼死体の一つは

毛沢東の第一の後継者と思われた

林彪と発表された。

中国現代史最大の謎

「林彪事件」に迫る！

第一章

国防相・林彪の子、林立果は天才パイロットといわれた。1967年夏、杭州湾上で

超低空攻撃訓練中の彼に、笈橋基地から「帰せよ」の緊急合図がでた……。

密閉された操縦席の前方には眼も眩むような真夏の太陽が高く輝いている。まばゆい7月の陽光が操縦席に充ちあふれている。全身を重くして厚いGスーツにビッチリと包んだ林立果は、胸もとに汗がしみ出し、微かに衣服が貼りつくのを感じた。

「なぜ汗が出るのだろうか？ 緊張したのだろうか？ V彼は中心かそかに思った。A昨日受けた異動命令で睡眠不足なんだ。だが今は飛行中だ、しばらくは何も考えまい」

彼は左手で座席の横の酸素調節ボタンを探しあてると、大きくひねり、透明な酸素マスクからでてくる微かに甘みを帯びた酸素を急いで何度か吸い込んだ。頭のなかですっきりして、身体中の緊張がほぐれるような気がした。

膝の間に直立している太く、操作のしやすい操縦桿は、力強い右手で柔かく、軽やかに握られ、両足で軽く踏んでいる尾翼方向舵と相呼応している。彼は自分の意図と要求とを瞬間的な細かな動作を通じて完全に、適

確に機体に伝えることができている。そればかりか、飛行時における機械全体の微妙な反応から自分の身体の何千何万倍を超える巨大な力をも感じ取ることができる。

この力は熟練したテクニクにより、自分の身体の一部になっていた。何という強大な生命力！ それは音速を突き破り、時間を追いかけ、一切の自然の法則の束縛を懸命に振り切つて、あの神秘的な四次元の世界へと入っていくとする……。

うっすらとした細雲が強烈な太陽に照らされ、銀白色のやわらかな絹糸玉のように輝いている。下方、高度2000呎のあたりだ。さらにその下は渾しなくキラキラと輝くエメラルド色の海だ。淡黄色の杭州湾はもう速く離れてしまった。ここは広大な東海の上空である。はるか彼方の水平線に灰色のゴマ粒の群れが現れた。このゴマ粒のような点はたちまち大きくなった。レーダー装置でたしかめるまでもなく、ひと目でそれが舟山群島であることがわかる。こ

の飛行経路に林立果はよく馴れている。ここで彼は新型超音速戦闘機の新しい編隊法をつくりだした。また、三機連続迎撃戦法もまとめあげた。超低空攻撃技術を模索し始めたのもここである。

彼は飛ぶことが何よりも好きで、飛行技術を熱心に考案し、研究していた。現在の飛行技術研究開発の仕事にも、「副長」という職務上の地位にも満足していたのに、なぜ、空軍司令の呉法憲は自分を空軍第五軍独立団からひきはなし、無味乾燥な行政の仕事へ配転することにしたのだろうか？

彼にとってはすでに生命の一部となつてしまった「五〇一」号戦闘機を離れて北京へ行くなど、ほんとうにいやなことだった。ましてや現在あの紅衛兵ともが大騒ぎしている北京になど――

予定の飛行計画によれば、彼は高度7000呎で大衛山のレーダー基地の標識を通過し、その後、北北京に進路をとり、左に旋回して訓練空域に進入、低空

真相つかめぬ林彪事件

1971年9月13日午前2

時半ごろ、英国製トライデント軍用輸送機が、モンゴル人民共和国の国境に墜落した。燃えくすぶる機体の中には、男女の判別もつかぬ九つの黒こげの焼死体、多くの書類、ドル紙幣等が散乱していた。

その焼死体の中には、林彪・葉群夫妻、長男の林立果が含まれていた、といわれる。

(この事件が日本で「解禁」になったのは翌年夏だった) 1966年8月の十一中総会で、党中央第一副主席として毛沢東に次ぐNo.2の地位を獲得、1969年4月の第九回党大会で毛沢東の後継者に指名された林彪が、なぜそのような無残な死をとげるようになったのか？

毛沢東の「後継者」といわれながら、識見、広い声望などの点で周恩来首相に劣り、あせつた林彪は1970年8月の二中全会で、批判打倒された劉少奇以後、空席になっていた國家主席の地位を要求したが認められなかった。

そこで、林彪は(1971年)9月12日、毛主席が南方

視察に出かけた機会に乗じて

上海付近で毛主席の乗った列車を爆破し、毛主席を殺害するという目的を達せんと企んだ。陰謀が明らかになったあと、林彪は9月12日午後、北京を出発。イギリス製航空機で敵に投降し、国に叛かんとしたが、国境を飛びこえてから、モンゴルのウンデルハン

附近に墜落した。林彪・葉群・林立果およびパイロットが焼死した(中国上級党員に配られたといわれる。9・12林彪の叛党事件についての公報)。

この毛沢東暗殺計画には黄永勝軍総参謀長、呉法憲、李作鵬、邱会作ら各副参謀長も加わっていたが、彼らは林彪とは別にヘリコプターで逃げようとしたがこれまた失敗した、と伝えられた。

中国の公式宣伝機関は林彪らを「ブルジョワ野心家で、ひそかに外国を通じていた陰謀家」ときめつけ、以後、大だ的に「批林批孔」運動がおこった。いずれにせよ、中国現代史の中の最大の謎とされる事件であることは確かだ。

林彪事件

小説



1966年8月5日、毛沢東は自ら「司令部を砲撃せよ」という、暗に劉少奇を批判する大字報を書いた。写真は、その大字報をかかげてデモする紅衛兵たち。文化大革命の大字報の最初は同年5月、北京大学内に貼られたもの。

攻撃訓練を開始することになった。
 すべて異常なし。膝の前中央にあるレーダースコープには彼に従っている二機の僚機はうつらない。しかし、岳雷と唐力夫の二機が、共に正確に戦闘隊形をとりながら、忠実にあとに続いていることは見なくてもわかっている。
 「長年の経験から、特に現在のように電子盗聴装置の高度に発達した時代では、無線通話を他人に盗聴され、軍事行動目的を知られることを防ぐために、空中では敵機との戦闘時以外はマイクローブを使って通話を行う。基地、あるいは僚機との

交信はすべてデータリング装置を使用する。その方法は、僅か三桁の数字を使用するだけだが、千種類もの異なった数字符号に組合せることができる。その数字の組合せの中で暗号として規定されたものは三十数種類余りだ。軍事用語としての組合せ数字以外にも、それぞれの中隊には彼等の間だけに通じる暗号があり、その中のあるものはすでに軍の合言葉になってしまっていた。例えば、642は中國の有名な罵り言葉「他媽的」(くそっ、畜生め!)であり、866はガールフレンドとのデートを意味する……等である。五空軍の張軍長でさえ、人

を叱る時にはしょつ中、642を使って感情を発散させていた。
 近頃では、意味のわからぬ数字ができて、社会政治運動にまで関連するようになったので、軍の党委員陳耕雲政治委員は、数字を組合せて日常生活の中で使うことを禁止する旨、再三命令を出したが、効果はほとんどなかった。
 突然計器盤の右上端の赤い豆ランプが点滅しはじめた。同時にデータリング装置にも、004と、375の二種の数字がかわるがわる映し出された。これは筑橋基地の作戦指揮部のコールサインと命令伝達開始の数字である。
 林立果は即座に応答ボタンを押し、記録装置をセットした。彼が左に操縦桿を倒し左尾翼の向きを軽くふむと、この16の重さがある戦闘機はたちまち左旋回して下降しはじめた。左手で、連結しているスロットルを手前にひいてパワーをしぼり、右手で前に押す力を強めるにつれて、硬質プラスチック製の透明な操縦席の先端にあった水平な地平線が、ゆるやかに上昇し、四十五度に傾いた。エンジンの推進力は減ったが、旋回して下降する猛烈なスピードは依然として林立果を操縦席の背

もたれにびったりと貼りつかせた。一見、どんな軽微な動作にも、強大な意志と力が必要だった。
 林立果の明るい瞳は、じっと電波高度計のメーターをみつめている。ぐるぐると早い速度でまわる緑色の光を帯びた指針は、ちょうど時計の針と反対方向に回っている。高度は5000、3000、2000、1000……と下っていく。
 林立果のよくととのって、きりりとひき緊った頬の筋肉がビクリと動き、高く鼻筋の通った

低空飛行にある精神の昂り

あたりには汗が吹き出てきた。鷹のような鋭い眼光が高度計を凝視している。4000呎のリカバリー・ポイント(引越し高度)が近づいた。しっかりと握った操縦桿はこの時右手で強く、ゆっくりと胸元へ引き寄せられた。軽く方向舵を踏むと、まるで猛然とおそいかかって来た海が、この時近づく速度をゆるめ、操縦室の上端に傾きつつ覆いかぶさっていた水平線も、ゆっくりと水平になって下ってきた。高度1000呎で水平飛行に戻ったのだ。
 マッハ〇・七という速度で飛んでいる現代のジェットパイロットは、もし低空を飛行したり、あるいはすっかり慣れていくコース内で、地上の障碍物、例えば丘、鉄塔、家屋、高圧線などより遙かに高く飛んでいる時、とっさの場合に前方の計器類を見て、エンジンの温度、油圧、電圧が正常か否かを確かめる以外は、主に注意力を方向指示器と、高度及びレーダー装置に集めている。音速に近いスピードなのに、前方と両側に対する相対的な比較物体が少ないので、スピード感がなくなり、時には一種の静止状態に陥ったよ
 うな錯覚がおこる。飛行経験の少ないパイロットは、夜間飛行中、地上の灯が天蓋に反射して、上下の方向さえも分らなくなる。これを解決するにはもちろん完備された計器が必要だが、経験を積んだパイロットは計器など見る必要はない。思考力も理論もいらぬ。ただ感覚に頼るのである——つまり尻の圧力感で分るのでだ。
 要するに、高空を非戦闘状態で飛行している時は、精神を集中する必要があるとはいえず、その精神的な圧力は決して大きなものではない。地上連絡の協力や、完璧な飛行計画、細密で正



この作品は「北京のいちばん寒い冬」(51年度文藝春秋読者賞受賞)、「絶対零度下の綱」につづいて書いた三番目の小説です。これは林能その人を主人公にした小説というよりも、林能事件が起こった原因とその社会的な背景を描こうとしたものです。

虹は美しい光の環ですが、つかもとすれば実体のない空虚なものです。権力、政権の玉座ともいうべき「国家主席」に、それはなぞらえることができます。

人民は大地であり、大地をはなれてその虚しい美しい光を追い求める——その結果はどうか、歴史はすべてを、あまたところなく語っています。露練闘争と呼ぶにせよ、

権力闘争と呼ぶにせよ、中国共産党最上層の人事の変化はかならず最下層の人民に大きな変化を引起こします。生活、仕事、思想、そして人生の目的にまで影響を与えます。

この小説を書くため資料を集めているうちに、十数年来の中国人民が受けた痛苦と圧迫はいかにひどいものだったか、身にしみて感じました。中国はいま多数の作家を動員して、この暗く血塗られた時代の真実を記録し、後世の教訓とすべきだ、と思います。

この作品が「四つの現代化」の道を歩みはじめた中国の困難と、人民の苦難をよりよく理解し、青年たちの希望が何であるかをわかってもらう一助にでもなれば幸いです。

漬物党の楽しみ

(女優)司葉子

私は大の漬物党です。我家のぬかづけは勿論、私がつけます。又お漬物を盛合、せる小鉢等、ぶらつと町に出た折り求めたり、ある時は田舎の古道具屋さんで伊萬里や有田焼の鉢を見つけ、季節の漬物に合せて使いわけ楽しんでます。これらの器は何故か、京の漬物にびつたり調和するものです。なかでも千枚漬は大好物、小さいならすべり、お酒のつまみでいっぱいかたむけます。

確な整備などが、パイロットに十分な完全感を与えてくれる。死と向い合う危惧など全然必要ないのである。

だが、低空飛行はまるで違う。時速が600キに近づくと、機体の両側を猛烈なスピードで通りすぎる物体は、ただ一かたまりの影にすぎない。肉眼ではもはやその形や色の見分けはつかない。前方にたった今見えた黒点は、神経が十分に反応する前にはるか後方に飛び去っていく。人間の自律神経の反射能力が人間が作りだしたスピードについていけなくなるのだ。

人体の感覚とスピード反応の不足を補うためにとりつけられている。地形回避装置「はれーダー」の発達とともに、超低空飛行技術のむずかしさを多少なりとも解決してくれた。しかし、

パイロットの負担が重くなったことも確かである。

ここは懸瀾列島海域で、大小数百の緑の島々が、一望千里の紺碧の海中にそそり立ち、波頭がまるで白い花環のように茶褐色の岩をとり巻いている。これらのすべてがみんなアツという間に消えてしまった。林立果はるか遠く針路の前方をじっと見つめ、全身の注意力を集中した。耳は注意深く地上接近警報装置の絶えまなく発するピーピーという信号音を聞いている。

懸瀾列島を迂回し、彼は沿岸の各レーダー基地が彼を見失ったことを確信した。これが今回の作戦訓練飛行の第一段階であり、さて、これから彼は攻撃行動に移ろうとしていた。

高度は引き続き50層に保ったままだ。エメラルド色の島々が

稲妻のように左右を掠めどび、探検隊内の耳を刺すような信号音が混り合う中、低空飛行でしか味わうことのできない強烈なスピード感に、林立果はこの上もない精神の昂りを覚えた。この時、彼はすでに自分の肉体という存在を無視していた。意志と自信と力だけが存在していた。そして、あらゆるものがこの強大無比な戦闘機に結果し、溶け合い、分かたつことのできぬ混合体となった。

レーダー装置の上端にある前方の障礙物を警告する赤ランプが突然光り出した。林立果は落ちていて少し機首を起した。高度は80層、100層。海に別れを告げた。緑の大地と、鏡のような湖や河川が前方にきらめき現われた。赤ランプがまた光った。

今週の数字 三百五十勝

近鉄を退團し、今期かぎり引退する米田哲也投手は、二十二年間で金田(現ロッテ監督)の四百勝に次ぐ三百五十勝をマーク、またプロ野球初の最多登板九百四十五試合など輝かしい記録を残している。

おつけの

大安

だ い や す

全国どこにでも お届けできる、ご家庭向けの通信販売を承っています。(カタログを返します)

お申しつけは... 平安神宮東 〒606
京都市左京区 株式会社 大安 (だいやす)

- 本店 京都
- 京都店 京都
- 都京店 京都
- 平河店 京都
- 安原店 京都
- 神光店 京都
- 宮町店 京都
- 宮三店 京都
- 東桑店 京都
- 東名店 京都
- 百貨店 京都

スロットルを絞ったので、速度がゆるやかになり、彼は鉄道沿いに西へ向った。今まで極度に張りつめていた神経もゆるみ、思考の余裕もできた。現実の世界へ戻ってきたのだ。

リーダースコープには、今回の訓練計画中に彼を捜索し迎撃にくるはずの飛行機の影は見つからなかった。なぜだろう？

まさか第四中隊の黄敬亭はこんなに役立たずではあるまいに。



1966年8月18日、毛沢東主席は天安門で第一回の紅衛兵接見を行った。プロレタリア文化大革命を祝う百万人集会もひらかれた。写真は右より江青、周恩来、林彪、二人おいて毛沢東主席。

シートの右側のホランプが点いた。数字盤に004と333の数字が現われた。これは「すぐさま飛行場へ帰投せよ」との緊急命令である。どうしたのだろうか？ まさか唐力夫が事故でも？ そんなはずはない。

では敵状に変化があったのか？ こう思いつくと心臓が不意にキュッとなった。今は訓練飛行中なので対空ミサイルと燃料補助タンクも装備していないし、現在の燃料はあますところわずか五分の一だ。まったく「642」(くそっ、畜生!)だ。

彼は素早く地上の空軍第五軍の防備の配置状況を胸算用していた。空軍第五軍は附属している高射砲とレーダー部隊のほか、迎撃部隊を主として瓊州及び衡州基地に配置してある。その六つの戦闘機団にはソ連のミグ19型を基本とする改造型機が配備されてい

るので、もし上空を侵犯する敵機がF104型なら何の心配もないが、万一やってくるのがF4だといささかことは面倒になる。ここ数年來、このミグ19型機にもミサイルを搭載し、電子装置を改良したのだが、速力があり出ないという欠陥は根本的な設計問題である。速力が出ず、上昇力が弱いと、F4に出遇った時には、相手の発射する対空ミサイルから逃れるのが関の山で、その後、追跡する術もなく、敵機は遙か彼方へ逃げてしまう。

いま林立果が操縦している新機は、速力の点でも、上昇力の点でもすべてF4に勝っている。しかし、この新機は目下のところまだ実戦の経験がなく、機数も少ない。いま飛行中の何の武装もしていない三機の他に、地上に残っているのは三個中隊だけである。

万一彼らがまっしぐらに飛び立ち敵を迎え撃ち、撃ち落されでもしたら、部隊の名譽を傷つけるばかりか、自分の責任にもなる。

彼は意を決して戦闘規則を破り、通話ボタンを押し、咽喉元にあるスロットル・マイクでせきこむように呼んだ。

「004、004、こちらは501、応答願います」

親孝行で

親孝行



「八つつあん、親孝行がしたいそうだな。」

「肩たたいてやろうと思うが、どうだろう。」

「まるでガキのやることだね。」

「じゃ、オタカラにするか。」

「心のこもつてない話だな。」

「どうしたらいい、大家さん。」

「そうさなエレキのカラクリ椅子なんかぴたりだな。」

東芝のご隠居が持っている、あれか。

「名前がまたいい、親孝行つてんだ。」

「きめたノありがとよ。」

TOSHIBA

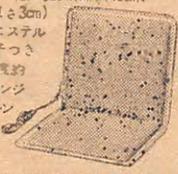
理想をつくる技術の東芝

親孝行

東芝座り付ヒーター

CZ-405 5,600円

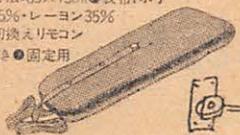
- 40W ●寸法: 43×83cm(座面40cm、背板43cm、厚さ3cm)
- 表地: ポリエステル
- コードスイッチつき
- 中央表面温度約40℃ ●色: オレンジ・ブラウン・グリーン



東芝ヒーターパッド

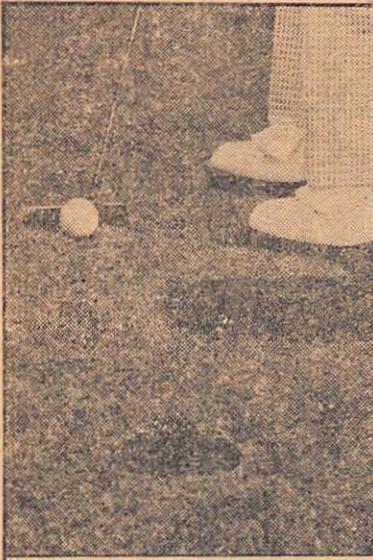
CP-405 4,980円

- 40W ●寸法: 85×15cm ●表布: ポリエステル65%・レーヨン35%
- 強・弱切換えリモコンスイッチつき ●固定用ひもつき
- 色: 黄



●東芝電気暖房器具には保証書がついています。お買い求めの販売店で所定事項を記入した保証書を必ずお取りください。

林彪事件



飛行用ヘルメット内の両側のイヤホーンを通じて、はっきりした声が流れて来た。話し方ですぐに宛橋基地の作戦指揮室にいる袁参謀だと分った。

「501、501、001より直ちに帰投せよ」

「521は上って来ましたか？」

「みんな下で君を待っている。すべては下りてから話す」

林立果は訓練飛行を中途で取り止める権力を持っているのは空軍第五軍の張軍長しかいないことに気付いた。けれども、それは何のためだろう？

彼はただちに帰投せよの組合せ数字をデーターリング装置で二機の僚機に発信した。同時に機首を下げ、急降下していった。高度計は狂ったようにぐるぐる回り、大地は猛然とおそいかか

るように拡大しはじめた。穏やかに静まり返った西湖と、建物が密集している杭州市をひととびに通り返ると、高度5000尺で機首を立て直した。Gスーツはその瞬間膨脹して全身を圧迫し、腹や大腿部がまるでタガで緊めつけられたようになり、呼吸さえ苦しくなった。彼は稲妻のように宛橋飛行場の上空を駆け抜け、大きく旋回して、三号滑走路に着陸した。

7月半ば、正午、地上の気温はとくに摂氏三十五度に達し、いくらか風があるとはいえ、真上から直射する陽の光と、コンクリートの地面からの反射熱をやわらげることとはとてもできない。玉の汗が林立果のスポーツツリりの髪の色から吹き出し、陽に焼けて赤茶色になった広い額に流れ、珠になった

後、濃い眉ぞいに頬に流れた。林立果の顔つきはきびしく、引き緊った頬の肌はピンと張り、鷹のような鋭い両眼は一心に僚機五〇二号機の着陸の様子を見届けている。

五〇二号機が正確な角度と速度で、主輪を滑走路上に触れ、機首を下げ減速用パラシュートを出した時、林立果は満足し、身を翻して機上から地上へ下りて来た。指揮部のビルからジープでかけつけ、じっと待っていた袁参謀は素早くかけ寄った。「張軍長が良山門でお待ちです」

林立果は彼に一瞥をあたえ、振り返って維修組長に命令した。

「すぐに離陸準備をしておいてくれ。二号、三号機も同様だ」と言うなり大股でジープに歩

み寄り、乗り込んだ。ジープは緑一面の平坦な草原を走っている。林立果は車中で手ばやくGスーツを脱ぎ、いつも着ている軍服に着換えた。つばの軟かい軍帽をかぶり、ヒサシを目深くきけた。

袁参謀は興味深げに、後部シートから林立果を見つめている。軍の首長から「天才」と讃えられているこの青年は、1966年8月、ハルビン軍事工程学院から保定第八航空学校に転校した。大学四年生の林立果は、たった四カ月で、他の学生が二年かかる基礎学科と中級飛行課程とを修了した。前例を破って今年6年の1月には成都の高等航空学校に転入し、国産の新型超音速ジェット戦闘機「峨眉三型」の訓練を受けることになった。4月にはまたそこ

をまれにみる優秀な成績で繰り上げ卒業した。その頃、空軍司令部は試作後四年、改良に改良を重ねた新型戦闘機の戦術方法を摸索していた。そこでこの優秀なパイロットを空軍司令部作戦室直属の第五空戦独立団の団長に選抜した。

そして一般の実戦部隊にはまだ配備していない「峨眉三型」戦闘機を率いて、空軍第五軍が駐屯し防備に当たっている浙江軍区の宛橋飛行場で、新型機の戦術研究に当らせることにした。

袁参謀は湖北の出身で、年齢は林団長よりずっと上で、第四野戦軍出身である。彼は最初に空軍に配属され、地上勤務の訓練を受けた仲間の人である。朝鮮、福建等の戦争の訓練を経て、現在では連長級の指揮官で

今週の数字 二五・四%

巨人の独占のまま、一強五弱に終始した今年のセリーグペナントレースだが、そのなかで健闘し球歴史上初の二位につけたヤクルトは観客動員数を一気に伸ばし、昨年の二五・四%アップの百六十一万人を記録した。

やっていますか、無税で貯蓄。

お宅では、国債の特別優待をお使っていますか。来年から貯蓄の税金が35%に引上げられる(分離課税の場合)、貯蓄は無税の特典をフルに生かしたいもの。国債は特別優待でご家族おひとり600万円まで無税貯蓄ができます。

国債貯蓄で10年後9.28%の高利回り(単利換算)

期間	100万円すえおき	平均利回り
3年後	122万2,600円	7.27%
5年後	139万3,000円	7.78%
7年後	158万7,300円	8.34%
10年後	193万5,700円	9.28%

注) 年平均利回りは発行条件に基づき、理論値により算出。単利換算。換算の場合は、市場価格で売却し、売却価格から取引税、手数料を差引きます。すべて非課税扱い。

国債

新日本証券

本店/東京・日本橋1丁目 103 全国主要都市68支店
海外/ロンドン・フランクフルト・ニューヨーク・ロサンゼルス・香港

国債とは(国債貯蓄)の(わしい資料はあしあげます。お客に右のシールを貼付し、住所・氏名・郵便番号をご明記の上、本店サービスセンターまでお申し込みください。

資料請求
国債
文

ある。彼ははじめ、わずかに十一歳になったばかりで団長に任命されたこの若者に会った時、心中穏やかでなかった。秘かにこう思ったものだ。もし副総理と国防相を兼任している父親・林彪の七光りがなかったなら、こんな若造なんぞ団長ならになれっこない、と。

ところがこの三カ月の勤務ぶりを見て、彼はしん底感服してしまっただけである。この若く逞しい青年が各種の訓練計画をたてる時の迅速さと緻密さ、それに計画を実行する際には少しもいい加減にせず、率先垂範だ。

指導力と組織力の面でも卓越しており、その上、戦術を総括する時の適確な判断力と論理の素晴らしさに、ほとほと感心してしまっただけだ。



党内の奪権闘争は文化大革命という「大乱」にまで拡大した。

ただ一つ、欠点と考えるのこの十何年というもの、北方に寒い季節がやって来ると、老衰きみの主席は、きまって南下し、しばしの間、杭州で寒さを避けるのが常だった。だが1965年には、もう秋の初めに早々と杭州へやって来た。

西湖はいつものように穏やかに美しく、色とりどりの群山に三方をとり囲まれていた。だが

は、この若い団長がかなり偏屈な暗い性格の持主で、人に近寄り難い感じを与えること、さらに高邁で何を考えているのか分らないところであろう。これは一般のパイロット達の、職業的ともいえる開けっぴろげで朗らかな性格とは正反対で、聞くところによれば彼の父、林彪の性格もそっくりだそうだが、この父にしてこの子あり、とは、全くよく言ったものだ。

袁參謀は、張軍長がなぜ突然に訓練中止命令を出し、ただちに林団長を呼びよせるのか、くわしい事情はしらなかつた。空軍第五軍の陳耕雲政治委員が作戦指揮室で張軍長とあわただし気に電話で話している折に耳にした言葉の端々から推測すれば、どうやら国内の某大軍区で重大事件がおこつたらしいのだ。

湖の西岸にある、俗に劉莊と呼んでいる山にある中央高官の住宅地区にはただならぬ空気がたちこめ、きびしい警戒がかけられていた。

1966年の春になると人民解放軍の総参謀長・羅瑞卿が主席のお召しをうけてやって来て、主席に報告している時、突如、逮捕された。この命令は国

防相の林彪が出したもので、実行動隊は、杭州警備司令官・王新根の率いる中央警備師団杭州駐屯部隊であった。天地もひっくり返るような党内の奪権闘争の序幕は、この時切つて落されたのである。

この序幕戦の時期、おだやかで静かな西湖は急に中国共産党の北京以外のもう一つの指揮管制の中心地となり、全国の各首長たちが群がり集る場所となつた。寬橋飛行場では連日飛行機の爆音がうなり、中央首長を乗せた飛行機が間断なく離着陸した。4月中旬に開かれた杭州政

治局常務委員拡大会議を経てから、国家主席・劉少奇はインドネシア及びビルマの訪問旅行に出た。訪問を終えて帰国してみると、あちこちで混乱が起り始めている。彼は事態を深くうれい、すべての中央幹部たちを動員し、工作グループに組分けしてそれぞれの下部組織に送り込み、その力によって杭州から吹いてくる風を阻止しようとした。しかし、集中攻撃を受けた北京市委員会の崩壊は防ぐことが出来ず、人民大会秘書長・北京市党委員会書記の彭真は政治の舞台から引きずり下されてし

まった。



1966年6月3日、党北京市委員会の改組が発表され、第1書記の彭真が失脚した。陸定一、羅瑞卿らの失脚以後、いわゆる実権派は次々に紅衛兵たちのヤリ玉に上げられた。同年12月、彭真は紅衛兵に捕えられ、反革命修正分子として吊し上げられた。

5月16日、別の杭州会議で羅瑞卿の罪状が決定し、彭真を頭とするもとの文革五人グループを解消し、政治局常務委員会に直属する新しい中央文革小組が成立した。この新しい文革グループは、顧問を康生とし、組長に陳伯達、副組長に江青、張春橋、組員には王力、閔鋒、戚本禹、姚文元等が名を連ねている。

いわゆる「五一六通知」を發布し、全党全人民に修正主義に墮落した実権派に対して、造反闘争を勇敢に押し進めるように呼びかけた。

しかし北京の党中央は依然として全国のもとからある党の組織系統を支配し、公安系統、裁判所機構の協力の下に、残酷なやり方で北京をはじめ各地の反乱を鎮圧していった。それら造反した少数の大学生や幹部労働者たちは次々に逮捕され、反革命分子と見なされた。7月上旬に至って全国はほぼ安定した状態になった。

北京の劉少奇は大局が安定した状況の下で、中国共産党第八回十一中全会の招集を建議し、党内の規約により投票を行い、毛沢東の党主席の職位を罷免しようとした。この期間中、北京も杭州も異常な忙しきだった。

小説 林彪事件

今週の数字

四十九億円

体協が承認した五十三年度の要求予算額は、総額四千九億円、五十七年度の実行予算額の約三倍という。超大額予算だ。これは国民スポーツ振興、オリンピック、アジア商大会への選手強化事業に力を入れているため。



中村雅俊(文学座)

そのままひやで

ボトルから、そのままグラスへ……
おカンのいらぬお酒シルバー月桂冠
マイルドなコクとさわやかな香り……
いつでも楽しめる
気どりのないお酒です



緑のまあるいボトル

シルバー
月桂冠

清酒特級 720ml 800円

大倉酒造株式会社

全国に散らばっている中共中央委員は若干の軍隊を除いてそれぞれ北京か杭州のどちらかにかけつけ忠誠を示した、7月15日になると、北京にかけつけた中央委員の数があきらかに多いことが分った。

7月17日には以前から東北に駐留している三十八軍が、軍長・牟立善にひきいられて軍用列車で関内入りを強行し、天津を経て豊台に達し、北京市を包囲した。

すべての軍事行動は国防相・林彪の指揮によるものであった。彼ら三十八軍は北京衛戍司令部の職権の接収を終えるや、翌日には、もう毛沢東が何人かの中央委員をしたがえて、威風堂々と武漢から飛行機で、北京へ戻って来た。さながら凱旋將軍のように――。そして8月に

開かれた十一中全会において政治局及び常務委員会を改組し、劉少奇の序列を二番から八番目に下げた。そしてこの時、文化大革命と紅衛兵の造反運動を合法化した「十六条」も採択されたのである。

十一中全会で改組される以前の中央委員会副主席は劉少奇、周恩来、朱徳、陳雲、林彪の五人であったが、改組後は主席は元通り毛沢東だが、副主席は林彪ただ一人になっていた。

政治の舞台でまわる巨大な車輪は、その回転が非常に速い。ある者は懸命に努力して水車の羽根の縁までよじ登っていく。またある者は自分の意志ではなく、人に推されて登り、必死になつて羽根にしがみつくと、車輪はどの方向に回転するかわかっていない。自分がし

っかりと擲んでいる側が上へ昇るのかもしれないし、あるいは未来永劫に戻れぬ地獄の底へ落ちていく側なのかも知れぬ。

1949年の中華人民共和国成立以来、国の政權統治体制の支柱として公安、検査、法院の三つの機構は、度重なる政治運動の中で大きく成長し、その勢力は社会の隅々にまで滲透した。そして党、団、労働組合組織と相呼応しつつ、今では一切の社会の下部組織をしっかりと掌握し、党中央で決定した政策や指示に服従させている。この名譽ある社会主義独裁体制のすぐれた管理機構は与党を守り、全国を指導する重要な武器なのだ。この武器は相変わらず劉少奇を中心とする実権派の支配下にあった。毛沢東がどんな手段を用いても実権派を党規約や国

家憲法の外へ追い出し、撃破し、指揮権を奪回する方法は見出せなかった。

指揮権を手に入れられないなら、それを叩きつぶすことだ。これこそ当時の唯一つのやり方である。そこで「紅衛兵運動」が広く捲き起つたのだ。

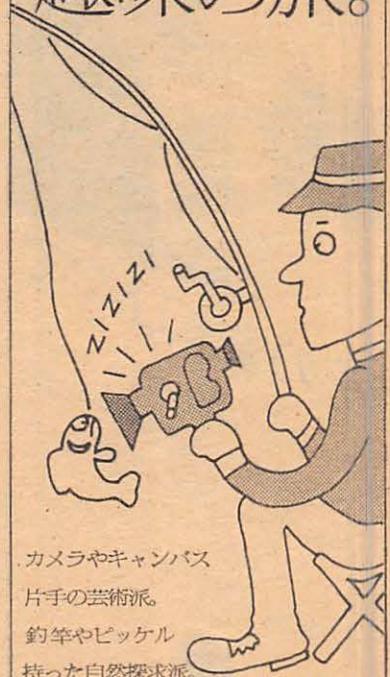
この一年間に、中央文革グループの指揮下にある紅衛兵たちは、全国各地の行政機関や党の委員会組織を凶暴に攻撃した。各地の実権派が彼らを守るために組織したもう一派の紅衛兵との間にも闘争を捲きおこした。国中が中央から地方の省、市、県に至るまで、二つの指揮系統によって指導されたため、混乱がおこり、秩序は乱れ、党内の奪権闘争は全国の「大乱」にまで拡大した。ただ一つだけつねに変わらぬ落ちつきと安定を保つ

ていたのが各地に配置してある強大な解放軍であった。これは中国共産党の最も重要な、最も重要な、政權を支配する勢力であり、絶対に混乱してはならぬものなのである。

× × ×
林立果と袁參謀をせたジープは、警備の厳重な寬橋飛行場の正門を走り出た。ゲート近くにバスの停留所になった小さな広場があり、そこには百人近い紅衛兵の腕章をつけた小、中学生がガヤガヤと集っている。彼らはスローガンを叫び赤旗を振り回し、まるでこれからどこかの大会へでも出かけるかのようだ。ジープは彼らの横をすばやく通り抜けた。袁參謀はいくらか緊張した。林団長は無頓着に眼を閉じたまま、まるで眠っているようだった。

くつろげる旅の新しいシリーズ

撮る。描く。 釣る。 趣味の旅。



カメラやキャンパス
片手の芸術派。
釣竿やピッケル
持った自然探求派。
何も持たない味覚派や温泉保養派…
趣味の楽しみ方は違っても、
グループ旅行は旅館カイルちばん。
対話も楽しい趣味旅行。



交通公社の
旅館券

日本交通公社協定旅館連盟・中部支部

寛橋の高さの不揃いな家並がつづく市街を迂回し、ジープは杭州市に通じる杭甬公路に入っ

た。道の両側に高くそびえる槐の樹の茂った枝葉が、緑のテントを造り、燃えるような真夏の太陽を遮っている。それほど広くはないアスファルト舗装の古い道はひっそりとして、人や車の影も見えない。前方から吹いてくる風が気持ちよく暑さを吹き飛ばしてくれる。青々とした水田を横に見ながら袁参謀は心中ひそかに思った。「今年の作物はできがいい。もしこんな政治運動がなかったなら、どんなにかつたらう！」

すべてはこんなに平和で静かで、こんなにやすらかで、ジープも何ごともなくスピードをあげて走っていく。袁参謀は飛行

場を出た時の緊張感も薄れて、林団長のように自分も眼をとじて、しばらく気を休めようと思

った。やがてジープは空軍第五軍軍部へ入ると、門衛の所でいったん停止してからすぐ右寄りに車を進めて中央広場わきの車道へ入り、あとはまっすぐ軍部ビルへ向った。

軍部ビルはありきたりの赤煉瓦造り五階建のビルである。ビルの前の車道に立っている旗ざおには五星紅旗が微風にはためいている。広場の左側の運動場には人影は見えず、うしろに建ちならんだ飛行機修理工場から聞える低く重くるしい機械の回転音が、むし暑いまひるに人の

眠気を誘った。ジープは軍部ビルの中央入口に停った。林立果は車から下り

ると、軍帽を手に足早に石段を登った。まっすぐにホールに入ると、もの馴れた足どりで幅広い階段にそって二階へ上った。

空五軍の張軍長の仕事場所は軍部ビルの二階全体の右半分を占めている。左半分は陳政治委員の仕事場所である。この二つ

右へ曲った。重々しい足音が静かな廊下に響く。あとからついていく袁参謀のせかせかせした足音がそれに混った。

守衛兵は一步踏み出し、行手を遮り誰何しようとしてハッと気づいた。大またでうつむきかげんでやって来た軍人はわずかに上げた帽子のひさしの下から、鋭い刺すような眼光を守衛

巨大な油絵に描かれた人物

の領域をはさんで中央の広い階段の正面が百人を収容できる大会議室になっている。会議室は大きなドアを閉じて森閑としていた。左右に通じる天井の高い幅の広い廊下の両端に、二名ずつの守衛兵が直立不動の姿勢で立っているだけである。

兵に向けた。守衛兵は軍人の身分をきとった。まるで巨大な力で押されたようにあわてて後に退くと、壁際に姿勢を正したのち、前に出て軍長の応接室の厚い木のドアを開けた。

袁参謀が林団長について軍長の応接室へ入ると、涼しい空気が肌にふれた。今までの暑苦しさですつと消えて、頭もすつき

りとした。応接室には誰もいなかったが、廊下の向い側の軍部弁公所の怪所長がすぐ姿を見せ、林団長を案内して応接室の右側の小さなドアにむかって歩きながら、女性のようなソプラノで話しかけた。

「貴方の降り方はまったく速いですね、林団長。軍長と政治委員が貴方待っておられますよ」
怪所長はすぐぐりした脚でさつさと歩きながら応接室の右側にあるドアの外までくると軽く二、三度ノックした。林団長がドアに一步近づくと素早くドアを開け、うつむいたままの青年軍人が軍長の事務室に入るのを、うやうやしく畏敬の念のあふれた態度で眺めていたが、おだやかな顔つきが急に平素の冷

林彪事件

酷で厳しい顔に戻り、いっしょに入ろうとした袁参謀をシロリと見ると、手を横に振りドアを閉じてしまった。

袁参謀は思わず足を止め、怪所長の顔をびくりしたように見た。さっき陳政治委員ははっきりと彼に林团长と一緒に緊急任務を受けるよう指示したではないか？

「貴官はここでお待ち下さい。もうしばらくしたら貴官にも重要任務が授けられますから」

怪所長はあとも振り返らず応接室を出ていくとボタンと音を立ててドアを締めた。残された袁参謀は一人立っていた。ソファに腰かけてもいだろうか？

いや駄目だ、これは重長用だ。彼はほんやりと立ち続けた。

空軍上尉参謀、質橋作被指揮部計画科科長として、はじめて

張軍長の応接室へ入った。張軍長が昔抗日戦争時代に毒ガスを浴びて呼吸器を痛めたのでいつも軍長が会議に出席する時はすべて禁煙になり、軍長の仕事場所と家庭にはすべて、中央軍事委員会が特別に空気調節器をそなえた。ここでもうしばらく冷氣に浸ってのんびりしたくなる。

南向きの大きなガラス窓は濃い茶色の厚地のカーテンでおおわれ、高い天井には数十本の螢光灯が青白い光を放っている。紺の木綿でつくった数個のソファが、半円形にビカビカ光る濃いエンジ色の床の上に置かれている。

左側の壁には大きな絵が掛っている。この油絵は、杭州美術学院の数人の教授たちに依頼して完成させようとしたが、何度

描き直しても張軍長の気に入らなかつた。最後には陳政治委員が労働改造中の、右派の教授を一人軍部に連れて来て、二カ月かかってやっと完成したものである。一般の幹部はこの話を聞いては喜まれないのだが、この時、袁参謀の眼は思わず絵に吸い寄せられた。

巨大な油絵には明るい陽の光をうけた二人の軍人が描かれている。堂々たる体格をした一人が前方を指さし、もう一人の瘦せた軍人は静かに説明を聞いている。二人の顔を見なくとも、これが偉大な主席と副主席であることは明らかである。

袁参謀はふと丘の頂上に立つ二人の後を見て思わず興味が湧き起つたのだ。丘のふもとに大勢の軍人の隊列が見える。彼ら

はまるで命令を待ち受けているかのようである。ある者は砲をかつぎ、ある者は銃を肩に、またある者は馬を牽き、荷物をかついでいる者もいる。これは長征の時の風景を背景としてとり上げて描いたのだろうか。だがその中に割に大きく、細密に描かれている若い軍人が一頭のたくましい馬をひいて待っている。この顔はどこかで見たことがあるが、さて誰だろうか？

この油絵は大きすぎて、部屋の中央に立つて、画中に立っている主席と副主席の顔はかなり見にくい。頭をあげ、無理な角度

林立果はいま長距離電話を聞いている。深く皺よせた眉が、広い額をさらに際立たせてい

る。これは軍用機密電話線で、話の相手は空軍司令員の呉法憲だ。

でないとな人は見られないが、その若い、忠誠心が表情にあらわれた逞しい戦士は、人の胸の高さの見やすい位置に描かれている。アッ！張軍長の顔だ！なるほど、それで労働改造農場から連れて来られた教授が絵を描き上げた後、空五軍の政治部宣伝所に席を手えられたのか。

もう長い間立っているのに、林团长はどうしてまだ出て来ないのだろうか？ふくらはぎがすっかり脹れてしまった。袁参謀は少し横になろうと、傍のソファのところへいき、そっと身体を斜にして腰をおろした。

空軍司令員呉法憲からの電話

安心できる旅の宿。



お値打ちな旅はオフ・シーズンを狙って。旅行業界の「月次調査」によると、全体平均として、1泊2食付宿泊料金(税・サービス料を除く)は一般客の標準で8,080円。それに対し、オフ・シーズンには、5,640円。オン・シーズンの70%の水準に設定されています。「温泉地」「海浜・山岳」などの立地条件により異なりますが、オフとオンの差は、約2,500円もお得。シーズン・オフの旅を、もっと計画していただきたいものです。



旅に出ようと思ったら 全国、どの交通公社からでもオンラインにより、旅の目的や条件に最適な旅館をすばやく、しかも確約で予約できる「旅館券」。いわば、便利な旅の前の前払券。1枚の価値ある「旅館券」が安心できる旅を保障します。電話による申し込みもOK!!お近くの交通公社各支店へどうぞ—!!

交通公社の
旅館券
日本交通公社協定旅館連盟・中部支部

今週の数字 十八団体 南アフリカ共和国政府は、人種隔離政策の反対組織に対する徹底的な弾圧にのりだし、キリスト教協会をはじめとする十八団体を非合法化する。同時に、ブラックアフリカの黒人新聞としては最大の「ワールド」を閉鎖した。

陳政治委員は眼をはそめて部屋の隅のソファに腰かけている。両手で湯呑みを持ち、熱い茶をゆっくり味わいながら、大きな紫紅色の木製の事務机のほしに斜に腰かけた林立果をじっと見ている。その若い、計りしれぬ前途をもつ青年は、空軍の最高中樞からの指示に注意深く耳を傾けているところである。現在、天地がひっくり返るような混乱の中では、いかなる地方の指導者たちも党、政、軍の幹部を問わず、誰もが中央の真の意図と方向をつかみかねていた。だが変化があれば、そのリズムにのらなければならぬ。どんな風についていったらよいのだろうか？ むずかしいことだ。学識豊かで経験の深い老革命家が粛清されたニュースが毎日のように伝わって来る。ちょうど、目の前に百本の道路があり、その中の一本だけが正しい道だが、果してそれはどの道なのか？ 歩かないわけにはいかないが、こわくて少しも歩けない、こんな状態なのである。

眼の前の、この青年は絶好の指標なのだ。彼がいるからこそ最高中樞部と直接連絡がとれるのであり、彼を通じてはじめて正確な中央の意図を汲みとることができるのである。

張軍長はいわむりをしてい

る。かすかないびきが聞えてくる。陳政治委員は湯呑みを置くのと、限りかけている張軍長の左肩をボンと叩いて小声で話しかけた。

「林団長は昼食はまだでしゅう？ もう12時すぎですよ」

張軍長はすぐ眼をさまし、頷きながら口の中でモゴモゴと言った。

「老王に何か食べ物をつくらせて食べさせましょう」

陳政治委員はすぐ別の端のドアから部屋を出ると、守衛兵たちの控え室へ入っていった。

ちょうど新聞や語録などを読んでいた兵士たちはあわてて跳び上り、中隊長の趙喜は急いで軍服の襟のボタンをかけ、顔を紅潮させ大声で言った「報告！異常ありません」

陳政治委員はいつくしみのこもった微笑で応えた。狭い室内は、五つの二段ベッドが空間の大半を占領し、西むきの木の窓は激しい太陽に容赦なく照らされ、ムツとするような汗の臭いと安たばこの臭いがたちこめ、六人の勤務明けの戦士たちの中には上衣を脱いでいても汗でラニンングシャツがぐっしょりの者もいた。

中央からの秘密電話の内容

「老王はどこかな？ 呼んで来てすぐ食事を作るように、林団長は昼食がまだなんだ」

老王は張軍長の最もお気に入り

の炊事員である。張軍長に仕

えてもう二十年にもなる。この

半年というもの、政治運動は

ついに革命大衆の盲目的な軍事

機関攻撃にまで発展した。その

ため、張軍長も丁家山に帰って

家族と共に暮らそうとはせず、

この二階の事務室のとなりの寝

室に寝とまりしている。幸いな

ことには、もともとこのビルを

設計した時、軍長と政治委員に

は一部屋ずつ寝室があたえら

れ、浴室、台所、警備員の宿直室までついている。最初は無駄だと思っていたが、今これ程役に立つとは思ってもみなかった。

陳政治委員は指示をすませて

から、警備の兵士たちに心を配

り、彼らとひとしきり雑談を交

した。この戦士たちはみな張軍

長や陳政治委員と同郷で、二人

に従ってもう長い間各地を転戦

している。彼らの前では陳政治

委員も、いつものあの情無用の

きびしさはまるでなく、兄貴か

親父のようにやさしく、自分の

できる限りの力で彼らの苦しみ

電車は、節約家。



省資源時代。交通機関も、この面からの見直しが行なわれています。電車はクルマの8倍以上もの高いエネルギー効率をもつといわれる「省資源の足」。これからも大都市交通のカナメとして、その役割がますます重くなるのは目に見えています。こうした時代の要請にこたえ、民鉄では、新線の建設・車両の新造など「輸送力の増強」や冷房車両の増備をはじめとする「サービスの向上」に、積極的に努めています。

日本民営鉄道協会

〒前東京都千代田区丸の内一六一四 交通公社ビル内

小説 林彪事件

今週の数字

八百八十億円

産産省の試算によると、最近の田高で、燃料として原油、液化天然ガスなどを大量に輸入している電力九社と大手ガス三社に「為替差益」として、今年度合わせて八百八十億円がころがり込むことになるという。



本居宣長

小林秀雄

▼11月1日発売！ 価4000円

おのれを捨てて学問をすればおのれのおのれの生き方が出てくる。
小林秀雄畢生の思想劇、——ついに完成！

本居宣長七十二年の生涯において、波瀾万丈の事件は、すべて古典文学味読のうちに、壮大な思想の劇となって起った……。温和な常識人として世に処し、文学に人生の意味を究めて「道」の学問を採った宣長の、その独自の経緯を明快精到に注釈、深い感動の世界に読者を包みこむ。「新潮」連載十一年余の思索を大幅に推敲、新たに、書下ろしの結語一章が加えられた。

新潮社

東京都新宿区矢来町71
振替東京4-808 ①162

わけ最近のように目まぐるしく世の中が変る時期には、彼が軍長の事務室に戻った時には、林立果はもう電話をかけた終えて、張軍長の事務室寄りの回転椅子によりかかり、上を向いてじっと吊り下げ式の電燈を眺めながら、なにやら考えこんでいた。

張軍長も相変らずゆったりと自分の大きな回転椅子にもたれている。焦りの色は少しも見えない。もっとも焦っていたとしても、彼は全然表情に出さないでいられる人なのだ。今までにあまりにも多く暴迫した場面に直面してきた。最悪の状況下

で、死地に追いやられながら敵とたたかい、脱出できたのは奇蹟だった。身近の何百、何千という兵士たちが、弾丸や爆風で肉片になって飛び散り、前後からの砲火は彼に地下壕へもぐる隙さえ与えなかった。もし一度白兵戦をやったことのある勇士の肝っ玉が鉄だとすれば彼のようにならぬ。戦場で命を削った老將は、天が崩れ落ちて来たどて眉一つ動かしはしまい。彼は軍人である。軍の階級制度が撤廃される前に大校（大佐）の位になったのは、並大抵のことではなかった。いまの世の中は、多くの軍人が血と肉

を、生命を投げうって得たものだ。いまのように、口先でスロークラウンをもてあそんでいるだけの官官どもに、我々をどうすることができるといふのだ？

最も大切なことは、自分が今に至るまで、この手で軍の裏権を握っていることである。空五軍は首都区域を防衛する空四軍のような簡易ではないが、実力と区域防衛の点から言えば東南の覇者であり、誰だって自分の側に抱き込みたいと思っはす。

彼と政治委員の陳耕雲とは、一つ釜の飯を食った何でも話せる古い仲間だが、林立果という

小僧っ子の扱い方については二人の意見がくい違った。

三カ月程前に、林立果がなんとかいう独立団を率いて新型機を操縦して空五軍にやって来た時、張軍長はすぐ、これはやりにくいぞと思った。指揮もできない。命令もできない。心の中で、これは呉法憲が空五軍の足を引っぱろうとする計略ではないか、と疑ったものだ。ところが陳政治委員の方は、これは一粒の「安心剤」だと考えた。中央が空五軍を信頼している証拠だと思っはす。

林立果はやって来てからも、軍部のことには何一つ口を出さず、忙しそうに飛行戦術を練っているばかりなので、張軍長の疑いは消えた。しかし、この二十何歳かの若造中尉を見かける度毎に、どうしても不愉快になるのである。中尉で団長に任命されることも、中尉で常軌を逸しているではないか。その上、団長がいつも軍長と起居を共にしていることが彼にとっては本当に耐え切れなかった。彼が軍隊でいちばん重視しているのは階級の上下の別であるのに、現在のように上下の区別をなくしたことで、彼は頑固な古い思想の持ち主になった。団長の父親が元帥であり大臣であり、副総

理であり、副主層であつても、父親は父親ではないか。息子は息子で中尉なのだから、待遇はどうしたつて中尉にふさわしいものでなければならぬ。陳政治委員はしよつ中、張軍長に言ったのだ。「時代は変わったのさ。時勢に通ずる者が世に出るのだよ」

武漢の陳再道たちがハニ〇一部隊をひきいて反乱を起こした。

今朝早く、空五軍の電信所所長がやって来て、ときれときれに耳にした中央の秘密電話の内容をこっそりと告げた。内容

は武漢軍区に発生した兵變の件、東海艦隊の舟山と南京に駐屯中の艦隊を九江に至急航行させる命令、などであつた。しかし、空軍司令部からは何の通知もないので、空五軍の最高指導者は慌てて会議をひらき、防衛のための措置と防空を強化し、それによつて外敵の虚に乘じた攻撃を防ぐことを決議した。だが実際に武漢軍区に何事が発生したとて、いまの我々はつんば

常の武装は必ず装備します」林立果はうつむいたまま言う。

「武漢の空軍にはミグ19があるだけだから、君たちに勝つてこないから飛び立たんだろう」張軍長が笑つて言った。「林君、武漢ではいったい何が起つたのか、我々はさっぱり判らない。中央が君を移動させるのは中央の命令だ。さいわい君たちの独立団はもともと独立して、我々の空五軍の編制には入つてないのだから、空軍総司令が君に九江へいけというなら、我々は気持よく送り出そう」

林立果にはこの老軍人の不満がよく判る。だが目下の情勢は緊急を要するのだ。はっきり説明している時間もない。きつぱりとした態度で立ち上ると、

「張軍長、直ちに移動作戦を出し、独立団が九江飛行場へ行くよう命令して下さい。これは呉司令員の指示であります」

林立果は拳手の礼をすると、相手の答も待たず、くるりと向きを変えて軍長事務室を出ていった。

「うぬぼれ奴が！ 権力を奪にきて人をバカにしやがつて。あれが目上の人間に対する態度か。なんて奴だ！」張軍長は閉じたドアに向つて憎々しげに言い放つた。しばらくすると卓上の内部電話機を取り上げた。受

話器の向うから修所長のうやうやしいかん高い声が聞えた。「はつきりと聞き取れたかね？」張軍長は責めるような口調でたずねた。だが顔には満足そうな笑いが浮んでゐた。しかしこの笑顔も次第にうすれ、やがて心配そうな表情に変わつてきた。まるく見ひらいた眼は隈尻の皺を減らした、ゆるんだ両頬もふるえ出した。

「何を聞いたんだね？」陳政治委員はイライラしながら張軍長が受話器をおろすのを待つて、すかさず聞いた。

「我々の考えているより事態はもっと深刻なんだ。武漢の陳再道と鐘漢華が今朝早くハニ〇一部隊をひきいて反乱を起した。洪山賓館を包圍して滞在中の主席とその他の中央首長たちに武力をもつて諫めようとした」

「主席は？ 無事だろうか？」

「今のところ様子が全然判らない。林彪総司令がすぐさま前線に駆けつけて、自ら指揮しておられる。武漢三鎮はもう陸海空の三軍に包圍された」

とかく、ハゲ頭や薄毛で悩む人達にとつてもっとも気になることは、いかに他人の目に自然に見えるか——ということではないでしょうか？

この点、このニドール人工頭髪は、確かに従来の概念を完全に打ち破つたものです。合成樹脂でつくつた人工毛を直接皮フに定着させるもの。もちろん人体には無害です。生えきわの自然さは当然のこととして、さわつても、引つぱつても平気。洗髪、ボマードも自由です。ご存知の通り、大勢のお客さまに人生観が変わつたと喜ばれてゐる理由があるのです。左記へお問合せ下さい。



現在4120本定着

「うぬぼれ奴が！ 権力を奪にきて人をバカにしやがつて。あれが目上の人間に対する態度か。なんて奴だ！」張軍長は閉じたドアに向つて憎々しげに言い放つた。しばらくすると卓上の内部電話機を取り上げた。受

驚異のニドール人工頭髪

執念の実験、実を結ぶ

カツラではない、直接皮フに定着する新「ハゲ解消法」

- 二ドール 京葉
 - 津川市市川一丁目六番地
 - TEL 4F 電話 市川市 325-2325
 - TEL 0473-211-0100
- 二ドール 大宮
 - 大宮市本町二丁目六番地
 - TEL 4F 電話 大宮市 265-2325
 - TEL 048-614-0100
 - TEL 048-614-0100

相談は無料です



小説 原題・向彩虹飛翔

夏之炎

林彪事件

華国鋒主席はこの8月の十二全大会で

「第一次文化大革命の終了」を宣言した

では、あれだけの混乱と犠牲をはらった

文革とは何だったのか？

文革の頂点にある「林彪事件」とは？

第二章

陳再道、鐘漢華らの手によって、毛沢東主席は武漢に「監禁」されている。空軍第五軍独立団の

林立果は、愛機の「峨眉」戦闘機に乗り

情況偵察に向かった……。

漢中地区は高温と渦巻く気流の下にあった。集中豪雨の季節にはまだ間がある。巫峡からほとばしり出た長江の流れは、荒れ狂いながら武漢三鎮のあたりまでくると、その青蒼さながらのたくましが静まり、一見おとなし気に、兩岸の長く続いた堤防の間を滔々と東南に向って流れていく。江西省の九江市

近くまでくると、堤防に阻まれ東北へと向きを変え、鄱陽湖の縁に澄んだ水と合流すると再び底力を増し、奔馬の群れのように、雲か煙か見定めつかぬ犬の涯へと流れていく。波は白い歯をむきだして堤防に噛みつき、九江市の河岸に停泊中の船にも激しくぶつかる。数知れぬ船が、強い流れに引

52 1/10 週刊文庫

小説 林彪事件



1967年8月5日、毛沢東の「わたしの大字報」発表1周年を記念して、北京で100万人集会が行なわれた。このとき紅衛兵や造反派が劉少奇、鄧小平、陶鑄の家におしかけ、公開演説を行なった。写真は100万人集会で天安門上より拍手する毛沢東。

きずられてはゆらゆらと絶えずゆれ動いている。そこには伝統的な帆柱の高い木造の帆船があれば、半世紀も前に進水したような鋼鉄製の貨物船もある。また機械類を満載して吃水が深くなった新型の河川用汽船も停泊している。どの船も人気なくひっそりとして、まるで死んだように緊留され、黒くろと寄り集まっている。

遠くの河面には数隻の大型軍艦がうす黒い姿で停泊中だ。その両側を小砲艇がせわし気に行き交う。飛沫と高波が岸辺につきながれた大小の船の舷に伝わ

り、白い泡は渦を巻きつつ流れに乗って下っていく。岸辺の波におびたらしいビラが浮んでいる。この粗末なビラには、あばき出された沢山の醜い事実や、反抗闘争のアピール、政權奪取のスローガンなどが印刷されている。豊かな河はこれらの紙きれをのせて遙か下流へと流れつづける。それはまるで武漢三鎮に住む数百万の苦しい境遇に陥った人民たちが、いままさに生きるか死ぬかのたたかいをしているたよりを、急いで、硝煙たちこめる長江下流の各都市へ伝えようとしているかのようだ。

1967年は年が明けるや否や、混乱と動揺の重大な局面を迎えた。北京の中央文革グループが支持する奪権造反運動は、全国的な規模でくりひろげられた。1月にまず上海の奪権に成功し、「バリ、コンミューン」を真似た「上海人民公社」を発足させた。このような官僚制度を葬り去った民主

選挙体制は、党、軍、政の三者が指導するという元来の伝統体制を掃がえし、あらゆる統率指導集団を壊し上らせた。反対に一番奮い立ったのは、革命への情熱で奪権造反運動に参加したすべての者だった。

両者の間の闘争はたちまち激化した。新疆地区の実権派は革命の飯面をかなぐり捨て、機関銃と手榴弾をもって造反した群衆をむごたらしく殺りくした。2月に入ると長沙と広州にも大規模な武闘がおこり、その後次第にエスカレートして、棍棒、石などから矛や大刀、火焰ビン、強力殺虫剤にまで及び、焼き打ち、ガス攻めまで始まった。

国務院の一部の高級官僚が、2月に開かれた中央擴大会議の席上で大胆にも文化大革命を否定したため指弾され、失脚した。全国各省や市の政治部門の責任者達は、すでに大きな庄力を受けていたが、この出来事を知って、今後は中央の指導者を頼りにすることができなくなっただことを悟り、自分のことは自分で守らざるを得なくなった。

しかし、これらの実権派たちも黙ってはいなかった。党、団、労働組合、民兵、公安等によって叩きつぶされてはいたが、未だに残っている組織を素早く強力に再編、退役軍人や近郊の

農民などを味方に、実権派自身を守るための「革命勢力」をつくった。

この「革命勢力」は人民銀行から現金を引き出し、物資倉庫から衣類、食糧、車輛、官信用具等を持ち出し、あるルートを通じて銃や弾薬さえも手に入れることができた。

こんなわけで、造反大衆は相対的に勢力が弱まった。北京の中央文革グループが遠くからいくら電気で激励したとて、人民日報が、要文闘、不要武闘（理論で闘争せよ、武力で闘争するな）といくら叫んでも、「革命勢力」の「造反大衆」に対する殺りくを少しも阻止することはできなかった。そして、この時はじめて造反大衆は気がついたのだ。今まで自ら中立だといっていた軍隊の指導者は、実際には実権派の側に立っているのだということに――。

当時中央がこれを統治するには二つの方法しかなかった。一つは中央文革グループが各地の軍隊に「造反大衆」を支持するよう命令し、「革命勢力」に渡している武器を取り戻すこと、もう一つの方法は自ら武装して造反奪権をやることである。

中央委員会は各種の手段に訴え武闘停止を呼びかけたが、4月30日から5月10日までのわず

林彪の十大罪状

「林彪事件」は未だにベールに つつまれているが、事件の後、香港の新聞などで、林彪の重大な十の犯罪にも流布された。

① 林彪は党内にもぐりこんだ大陰謀家・大野心家で、妄りに党を奪い、国を奪い、軍を奪おうと図った。② 我々の偉大な指導者毛主席を暗殺しようとする企み、それによって党を奪い取るという目的を実現しようとした。③ セクト主義をやり、軍隊内で新しい者を任命し、それ以外に打撃を加え、独立王国をつくった。④ 後継者の三つの条件を提起し、毛主席の五つの基準に対抗した。⑤ 「党が一切を指揮する」という毛主席の原則に反対し、鉄砲を党の上にも置こうと図り、鉄砲によって党を指揮せんとした。⑥ 毛主席の革命外交路線に反対し、わが党をソ連修正主義叛徒集団の指揮下に置こうとした。⑦ 偽装して積極的に党の信任をかすめとり、反革命二面派の手法を用い、赤衛隊もふたつに反対した。⑧ 裏で外国に内通した。⑨ 軍隊と人民の関係を離間させ、毛主席が自らつくりあげた人民の軍隊を大衆から遊離させ、ブルジョア独裁を實行する道具にした。⑩ 天才論を提起し、弁証法的唯物論に對抗し、自らを歴史を創造する救世主にしたあげた。（武内香里・森沢幸「中国の政治と林彪事件」より）

十日間に、首都北京だけで百三十三回もの武闘事件が発生し合計六万三千人余りがそれに参加した。更に四川省でも四千人以上もの死傷者が出た。

5月16日、党中央委員会は一年前に毛主席が杭州で自ら立案した一通の文書を公開した。さらに一歩進んで造反勢力を増強し、一年も頑強に抵抗している劉少奇、鄧小平、彭真たちを政治の舞台から引きずり下そうと企んだ。

このいわゆる「五一六通知」が発表されるや、造反大衆は自信をとりもどし、激しい奪権闘争にはさらに拍車がかかった。実権派に協力している軍人に対しても、また周総理が指導する



武漢の反乱鎮圧のため、空挺部隊も出動まじかた。

7月20日の午後から21日明け方にかけて、軍用機と臨時に徴用された民航の大型輸送機がひっきりなしに九江飛行場へ降り、飛び立った。上海郊区大場基地に駐屯していた空軍司令部直属の独立空挺師は戦闘体制をしき、緊急に九江へ移動した。狭い飛行場には一時収容しきれぬ程の部隊や、司令部後方勤務の用員、それに大量の軍需品が突然に運ばれて来た。そこで臨時

政務機構に対してさえも直接攻撃しはじめた。天地を覆すようなたたかひの幕が切つて落されたのである。

鮮血で祖国の大地は隅々まで染まり、人々の心は深い恨みと苦しみにさいなまれた。統一されてから未だ十数年しか経たぬ国家が、もうこの様な有史以来の大混乱に陥ろうとは——。そしてこの混乱の根源——中国共産党中央内部の奪権闘争は、上層の二つの主要集団の勢力が相

伯仲していたために簡単には決着がつかず、全国の混乱状態は長期化した。積み重ねる対立はますます深刻化し、ついに「量から質へ」と変つていったのである。

に徴用された市内の各学校や体育館、旅館、それに河沿いの倉庫などに分散駐屯した。林立果の率いる空軍独立団もこのときくさの最中に九江へついた。軍事委員会が臨時に設けた指揮戦闘部は、空軍独立団を九江市委員会の宿泊所に潮り当てた。宿舎は狭いが、騒がしい飛行場の兵舎よりずっとましだ。

林立果と団政治委員の方玉理には二階の東の突き当りのトイレ、浴室つきの特別室が割り当てられた。だが方政治委員と団

の参謀は臨時に設置された空軍指揮部の作戦計画に参加する必要上、飛行場に居るので、電信部隊に軍用電話を一本架設してもらい、それによって宿泊所との連絡をとることになった。

夜とおし低空を飛ぶ飛行機の騒音で、林立果はなかなか眠れなかつたが、朝の6時には起きて飛行場へ向つた。

飛行場の指揮部では部員たちが寝不足のため充血した眼で忙しく立ち働いている。絶え間なく送られて来る氣象データが大きな千分の一の地図の上に散らばっている。十数台の電話は一斉に通話中である。

林立果は濁った空気が煙草の匂いでむせかえりそうな地下室を出た。また明るい陽ざしに土埃が舞う飛行場へ出て来た。

岳雷と唐力夫が滑走路ぎわのジープで待っている。彼は黙って車に乗り込むと、メイン滑走路ぞいに飛行場の東北の端に向つて車を走らせた。そこには独立団の戦闘機が待機している。

滑走路のつき当りの広い野原は、草の緑が殆んど見えぬ位に、深緑色の戦闘服を着た空挺部隊の兵士たちでいっぱいだ。

ジープはクラクションを鳴らしながら、草に腰をおろしている

秋田訛を聞いた夜は
賑やかしんみり……
太平山

醸造元 秋田 小玉合名会社

人むれの中を通り抜けた。林立果は顔にありありと疲労の色を見せている純真な兵士たちの方をチラリと見たが、すぐに眼を閉じ気を散らすまいとした。

「報告、林团长、方政治委員達はみなここにおられます」
ジープの後部座席の岳雷が大声でどなった。

林立果は眼をあげた。独立団警備小隊の戦士たちが歩哨に立っている所から、飛行機の停止場所までの500程程の空地に方政治委員、整備連長の陳璋たちが揃つて駆けあして迎えに出ていた。

方政治委員の瘦せこけた顔はまた一段と青白くなっていた。彼の顔を見るたびに、胃の半分を切取ったことが痛ましく思い出される。

「いま宿泊所と連絡をとりまし

たら、貴官がもうこちらへ向われたとのことで……。ゆっくりお休みになれましたか？」
方政治委員は親しみを込めて低い声で話しかけた。

「私はよく休めました、あなたは一晩中眠らなかつたのではありませんか？ 任務はもう受けとりましたか？」

「上部から9時45分に任務を受けに来るよう指示されていますが、まだ早いですよ。あと二時間もあります。整備作業は徹夜でやり終えました」

林立果が陳連長をみると、白眼が充血している。おとといは一晩中訓練飛行の整備作業をやり、昨夜も一晩中仕事を続けた。まったく鉄のような男だ。

林立果は十二機の「蛾眉」戦闘機の検査報告を受けると、黙って手を差しのべ、しっかりと

心を陶然ときさせる充実の味わい。

ストレートが冴える。
ロツク、水割りがうまい。
カクテルもさわやか。
本醸造 沢の鶴原酒。
東大寺清水公照管長作の
格調高いパッケージと
ラベルが目印です。

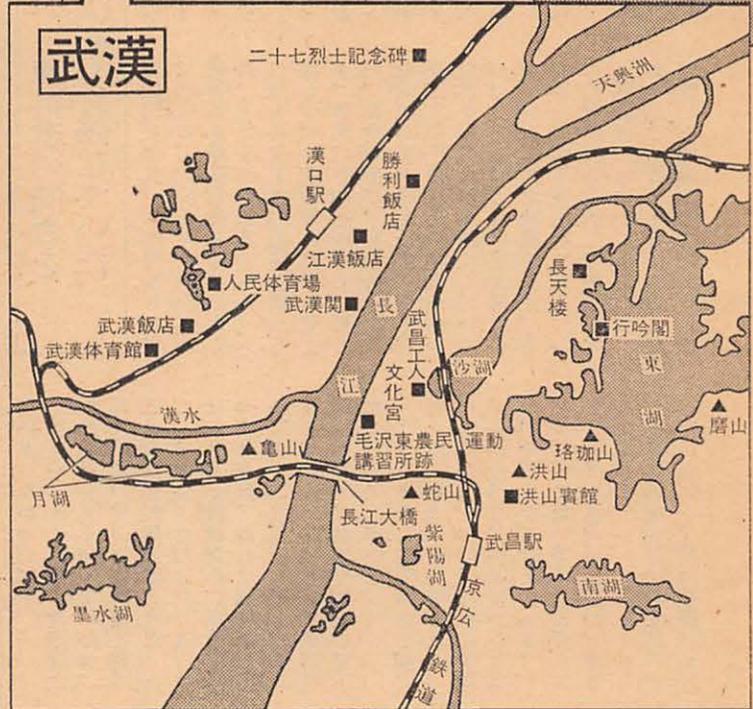
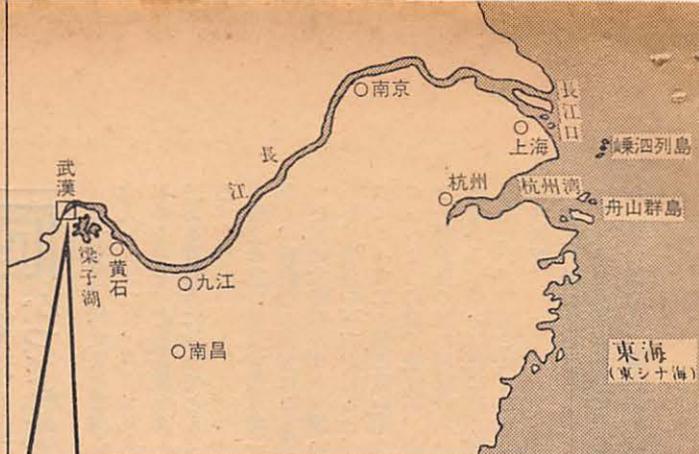


本醸造
原酒
清酒 ※ 澤之鶴

清酒特級 720ml 1,000円 (標準小売価格)
アルコール分 19.0度以上 20.0度未満
神戸・灘 沢の鶴株式会社

今週の数字 八千七百七十九円

クラレのアンケート調査によると、首都圏と京阪神で働くサラリーマンの十人に七人は慢性的病氣を持っており、その内訳は一位が水虫で二五・九%、以下肩こり、痔、胃炎の順で、毎月平均八千七百七十九円の健康費を使っている。



陳連長の武骨な手を握った。この例のないできごとで陳連長の顔はさっと赤くなり、直立不動の姿勢で大声で答えた。
「すべて敬愛する主席のため、革命のためであります」
林立果の暖かい眸の色が、とたんに鋭くなり、素っ気ない口調で、
「整備作業の終了次第、当直の警備員以外はすべてゆっくり休むように」
と命令し終わると方政治委員の方へむいた。
「すぐに空挺師団に連絡して、停止点から離陸滑走路までの通路を必ず確保して下さい。少くとも50分幅は必要です」
方政治委員は笑いを浮かべ顔き林立果の力強い足どりのあとにつづいて小声で話しかけた。
「連絡はもうついています。我がが使う時には彼らはすぐ道をあけます。あの空挺部隊の戦士たちは昨夜来たのですが、それからずっと朝の3時まで立ち通しなので、彼らの団長が相談に来て、通路を借りて兵士たちを坐らせて休ませたいと言っているので、私も同意したのです。彼らを少しでも休息させてやりたいですからね」
銀色に輝く十二機の戦闘機が停止線のうしろに一列に勢揃いしている。コンクリートの飛行機停止スポットの背後の草っ原に、五つ六つ緑色の野戦テントが組立てられている。一番手前のテントから、突然、独立団の通信員小李がとび出し、大声をあげた。
「政治委員！ 団長！ 早く指揮部へ行って下さい。緊急任務があります」

くつろげる旅の冊シリーズ

撮る。描く。 釣る。 趣味の旅。



カメラやキャンパス

片手の芸術派。

釣竿やビッケル

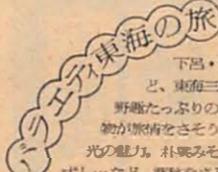
持った自然探求派。

何も持たない味覚派や温泉保養派…

趣味の楽しみ方は違っても、

グループ旅行は旅館かいちばん。

対話も楽しい趣味旅行。



下呂・湯の山・蒲郡……など、東海三県に散りばめられた野趣たっぷりの温泉や、ひなびた風物が旅情をさそふパヴェティ豊かな朝の魅力。社楽みそ・きしめん・いなりずし……など、奥座をさそふ味覚もいろいろ。(パヴェティ川原の旅)は気分を旅にうつってつけ、

235軒の旅館旅館がお待ちしています。

交通公社の 旅館券

日本交通公社協定旅館連盟・中部支部

反乱軍を率いる陳再道の能力を、 かつて林彪は高く評価していた。

三十分後、林立果は雷と唐力夫を引きつれ、高度2000呎の上空を、直線距離で2000キある武漢市に向ってとんでいった。

紺碧の空は見渡す限り雲一つなく、換機席の後方には高く昇った朝の太陽がキラキラ輝いている。機首の下方を見ると、右側には一すじの幅の広い絹のりポンのように輝く長江が、蜿蜒と一望千里の緑の田圃の中を流れている。広い河面には小船も見えない。封鎖されてもう二日目なのだ。

を偵察し、五、六度旋回してすぐ引き返し、決していかなる威嚇行為も戦闘行動もしてはならぬ、というのである。

地上の黄土色の道路には車も通らず、牛車の黒い点すら見えず、静かで平和そのものに見える。高度を下げ、死の街のような黄石市を通過した時、突然、長江に数隻の灰色の軍艦が白い航跡を残しながら遡江していくのが見えた。これは東海艦隊の中で最も強力な武器を備え、最も速力の出る駆逐艦である。かつて舟山群島海域に配備され、作戦訓練に協力していたのに、まさかこんなところで、こんな状況の下で参加していようとは

思いがけなかった。

林立果は多くの軍区指揮員と政治委員をよく知っていたが、武漢軍区の司令員陳再道と同軍区の政治委員鍾漢華とはたった二、三度会っただけだ。陳再道はもともと張國瀾の紅軍第四軍の出身だが、のちに劉伯承と鄧小平の一二九旅団に属し、1954年になってはじめて第四野戦軍へ移り、彼の父林彪の部下になったことがある。

1955年に武漢軍区が成立した時、司令員に昇進したが、その昇進発表の時、母親の葉群が笑いながら父親に言った言葉は、今でもよく覚えている。

「字も読めない無学な武者者になんぞですか？」

「彼が無学な者だなんて思っただけではないよ。彼は戦闘にかけ

ては大したものだ。アメリカのウェストポイント士官学校出の優等生だって、敗かされるのだから」

この戦闘に強い武者者が、今回、なんと毛主席を監禁したという。なんとという大胆さだろう。今後の彼のたまたかいぶりをぜひともこの目で見たいものだ。

毛主席を監禁したこの事件は、決して口外されなかった。一般の幹部と戦士たちには、ただ武漢軍区内のひとにぎりの走資派の反革命分子が、副総理の謝富治と主力を監禁したとだけ発表した。もし実状が知られたら、一つには全国の「大乱」に変化がおこる。二つには主席と党の威信がそこなわれる心配がある。いま一番重要な問題は、どのようにして主席を安全かつ迅速に救い出すかであり、

またいかにしてこの秘密を守り、絶対に痕跡をのこさぬように処理するか、である。

機首の下方に見えてきたのは明るく光った湖である。彼が何年も前に鴨を射ったことのある梁子湖だ。昔遊んだ地を再び訪れても、人も景色も変り果て、たとえ過ぎ去った時間を追いかけて取り戻せたとして、いったい何になろう。繰り返して人の世の苦しみを味わうだけではないか？

彼は二十三歳になったばかりだが、この五年という歳月は、五十年の長い歳月のように思われた。この狭い世の中で、すでに二人の人間から心に手ひどい傷手を受けている。この二人はどちらも女性だ。一人は彼にとって悪魔のような存在、彼は命の尽きる最後の瞬間まで、彼女を恨むだろう。他の一人は空の涯

小説 林彪事件

今週の数字

百二十四万五千件

昭和五十二年犯罪白書によると、業務上過失致死傷を除く刑法犯は百二十四万五千件で、前年に比べ一万余件ふえ、四十九年以来三年連続の増加となった。なかでも女性の犯罪、覚せい剤事犯などが急増している。

安心できる旅の宿。



お値打ちな旅はオフ・シーズンを狙って。「旅館経営の発展調査」によると、全体平均として、1泊2食付宿泊料金(税・サービス料を除く)は一般客の標準で8,080円。それが、オフ・シーズンには、5,640円。オン・シーズンの70%の水準に設定されています。「温泉地」「海浜・山岳」などの立地条件により異なりますが、オフとオンの差は、約2,500円もお得。シーズン・オフの旅を、もっと計画していた方がいいものです。



旅に出ようと思ったら
全国、どこかの交通公社からでもオンラインにより、旅の目的や条件に最適な旅館をすばやく、しかも確実に予約できる「旅館券」は、便利な旅の宿の予約券。1枚の価値ある「旅館券」が安心して旅を保障します。電話による申し込みもOK。お近くの交通公社各支店へどうぞ——

交通公社の
旅館券
日本交通公社協定旅館連盟・中部支部

にかかる虹のような女性で、七色に美しく空に映えているが遠くまで手が届かない。そのことが、いつも彼の心をさいなみ苦しませた。全精力を仕事に注ぎ、空を飛翔することによって、はじ

めてしばし心のやすらぎを得ることができるとだ。くねくねと曲った梁子湖が飛行機のうしろに去っていくと前方に東湖の美しいおだやかな姿があらわれた。長天楼、行吟

準備らしいと思った。橋の前後には土囊が積まれ進捗工事が始まっていた。林立果は工事中の兵士が慌しく行動するのを見て、どうやら対空射撃の

高いビルに挟まれた幅の広い中山道路がすぐに見つかった。500層の上層から見おろすと、数キロの道路には旗やのぼ

りが高く翻り、人の群れが押し合っている。林立果はこの光景にとまどった。どうもこれは、一にぎりの反革命暴徒が造り上げた恐怖の都市ではないらしい。どうやら自分は大勢の人がよろこびに沸き立つ祝賀行列の上を飛んでいるようだ。これはいったい何事だ？ 武漢市にいったい何が起ったのだろう。人の群れが三色に区切られている。黄みどり色は軍人で、白は学生と労働者、青は幹部たちである。その中にトラックが何輛か混じっている。まさしくこれは反革命分子がデモ行進をしているところだ。だがいったい「革命大衆」はみんなどこへ行ったのだろうか？ それにしても、反革命の人たちはなぜこんなに多いのだろうか？



1966年7月16日、杭州から8カ月ぶりに首都北京に帰る途中、毛沢東は武漢近くの長江で泳ぎ、健在ぶりを全人民に見せた。写真は民兵が毛主席への忠誠を示すプラカードを掲げて泳いでいるところ。

反革命分子はなぜ多いのか

再び左に旋回し、蛇山上空からまっしぐらに高々とかかった長江大橋を飛び越えたが、昔、車や列車が橋の両側から疾駆した、あの賑やかな光景は消え去り、大橋はしよんぼりと揚子江の上につぶおした姿に見える。橋の前後には土囊が積まれ進捗工事が始まっていた。林立果は工事中の兵士が慌しく行動するのを見て、どうやら対空射撃の準備らしいと思った。高いビルに挟まれた幅の広い中山道路がすぐに見つかった。500層の上層から見おろすと、数キロの道路には旗やのぼりが高く翻り、人の群れが押し合っている。林立果はこの光景にとまどった。どうもこれは、一にぎりの反革命暴徒が造り上げた恐怖の都市ではないらしい。どうやら自分は大勢の人がよろこびに沸き立つ祝賀行列の上を飛んでいるようだ。これはいったい何事だ？ 武漢市にいったい何が起ったのだろう。人の群れが三色に区切られている。黄みどり色は軍人で、白は学生と労働者、青は幹部たちである。その中にトラックが何輛か混じっている。まさしくこれは反革命分子がデモ行進をしているところだ。だがいったい「革命大衆」はみんなどこへ行ったのだろうか？ それにしても、反革命の人たちはなぜこんなに多いのだろうか？

開、湖光閣などの美しい建物も緑の樹々の間に見出された。右手の揚子江そいに延びている鉄路には列車の影もなく、白く光るレールが沙湖のまん中を横切っている。アッ！ 黒い大きなかたまりとなった群衆が、沙湖から洪山へと動いている。道路も広場も人の群れでいっぱい。彼は機首を下げ、洪山賓館の後方の武漢軍区をかすめて飛んだ。その広場は黄色い軍服を着た軍人で埋まっている。何をしているのだろうか？

押し合いへし合いだ。彼は機体を右に旋回させ、長江の中心にある天興州へ向うと、再び武昌上空へとつつかえし、熊家坡を経て東南にある武昌飛行場へと飛んだ。この時、ヘルメットのヘッドホンから異常な雑音がかきこえた。上空で警戒の任に当たっている雷雷と唐力夫から通信が入るのだろうか？ データリング装置を見たが何の変化もない。これはおかしい。

するとヘッドホンから微かな話し声が聞えてきた。
「こちら武漢空軍部隊、こちら武漢空軍部隊、応答ねがいませう」

林立果は一瞬迷ったが、すぐにマイクrowエープ通話機のダイヤルを回した。「こちら空軍独立団、こちらの身分と名前をどうぞ」

「こちら武漢空軍部隊副司令員の劉豊です。私は毛主席及び中央文革グループの指示に従うものであります。現在飛行場の一部が反革命軍隊の手で制圧され着陸不能、着陸不能。どうぞ」
「ただちに中央と連絡をとり、状況報告をたのみます」

「現在無練局が使えません。それから中央の各首長に伝言をお願いします……。太陽は元気で我々を照らしている。できるだけ速く、この飛行場周辺の安全

区を拡大し、輸送機を派遣して高級官僚を運び出して下さい」「了解。早速伝えます」林立果は素早く「掃校」の数字ボタンを押して雷雷、唐力夫の二人に連絡した。そしてスロットルを

九江賓館では林彪が毛主席救出の作戦会議を行っていた。

ジープが三台、フルスピードで飛行場を走り出ると、人っ子一人いない大通りをよこぎり、まっしぐらに牯嶺へ通ずる道を疾走していく。

やがて、ジープはにぶいようなりをたてながら、道の左側の高い丘へと全力をあげてのぼっていった。

いく重にも固めた警備地点を通過し、丘の上の大きな建物前の広場に入り、九江賓館の正門前に停まった。

九江飛行場内に設置された空軍指揮部の責任者、空軍政治委員劉賢操は林立果を伴い、多くの護衛兵に守られて軍事委員会の指揮部へやってくる、そそくさと会議室へ入った。

おりしも、なかでは軍事委員副主席兼国防部長の林彪が作戦会議をひらいていた。林立果の観察報告と武漢空軍部隊副司令員劉豊の重要調査をもとに、すばやく作戦計画を練った。この

全開にし、機銃桿をグッと引いた。ジリジリしながら状況報告を待っている多くの党や軍の指導者たちに一刻も早くニースを届けるべく、急いで九江へ向った。

作戦会議は午後2時ちょうどから始っていた。全国人民の敬愛のままとであり、みずからも文化大革命運動を指導し、指揮している毛沢東主席を、安全かつ秘密裡に反革命の暴徒や、反中央の作戦の包囲から救出するための軍隊会議だ。

林立果はもう長いこと父親林彪にあっていなかった。こんなところであうなんて思ってもいなかった。最高軍事会議のいちばん緊張した作戦会議中だからだろう、父親は彼の方をチラとも見なかった。左ひじをテーブルにつき、上半身を乗り出すようにして、右手に太い赤エンピツをもって、千分の一の大地図に丸印や矢印をつけている。同時に、各人の意見を要領よくまとめては、それぞれ海・陸・空三軍の共同作戦の指示命令をあ

たえていたが、特に時間遵守を強く要求していた。

この時、林立果ははじめて昨

夜のうちに武漢市を陸軍の二個師団が包囲し、また海軍も長江の上流から下流まで制圧したことを知った。舟山群島から移動して来た四隻の重駆逐艦は、南京海軍部隊の砲艇と合流し、すでに武昌から70キロの礄口で待機している。だが軽率な行動は絶対に許されない。一度火蓋が切られたらすべてが逆の方向に動きだす恐れがあり、いま反革命の暴徒の手中にある毛主席やその他の中央首長たちの生命も大きな危険にさらされるかもしれない。

しかし今は劉豊からの連絡により、主席や首長たちの様子も分っているので一撃を加えることができる状況下にある。

各兵種の責任者は次々と命令を受け出ていった。林立果も劉政治委員の後についてドアに向かったが、父親のことが気にかかった。振り返ると、父親はちょうど、二人の当番兵に抱きかかえられて藤椅子にいくところだった。眼鏡をはずした青白く頬のそげた顔、眼はしっかりと閉じたままだ。ここ二、三日仕事

事がきつ過ぎたのだから！

ジープが坂を下っている時、丘の頂きの広場で耳をつんざくような爆音がおこった。一機の大形ヘリコプターが飛び立ち半円を描いて一直線に西北に飛び

ユニフォームも経営戦略のひとつです。

白洋舎のユニフォーム

お客さまにユニフォームで接するビジネスでは、ユニフォームの良し悪しが、大きな問題となります。白洋舎では、ワーキングウェアやオフィスウェア、サービスイエなど、いろいろなユニフォームのレンタルやオーダーを承っています。ぜひ、一度ご相談ください。

Clean Living
白洋舎
本社 東京
●ユニフォームセンター
関東 03-460-1111
関西 06-380-8726

小説 林彪事件

今週の数字

四千六百九十万台

十月二十三日は電信電話記念日、普及率はアメリカに次いで世界第二位。

日本の電話台数は現在四千六百九十万台、国民二・五人に一台の割合、来年には一〇〇%になる予定だ。

日暮れ頃、林立果は疲れ切った身体をひきずるようにして宿舍の部屋へ帰って来た。方政治委員は整備員と一緒に戦闘機の保安点検に出かけ、宿舍へは帰ってこれそうもない。室内には二つのベッドがあるが、いまは林立果ただ一人、ぐったりとベッドに倒れ込んだ。



林立果が日記を書きおえたとき、「あの女」が入ってきた……

外は静かで飛行機の音もしない。政治の混乱のあらしの中心はずでに武漢に移ったのだ。鼓膜に異常なほどの静寂が感じられ、暗く重い頭の中はからっぽになったようで、何も考えたくなかった。

目を閉じると脳裡に焼きついた昼間のフライトで見た光景が、彼は低空を黒煙のもうもうと立ちのぼる武昌駅にむかって飛んだ。そこは先発した空挺部隊の降下地点である。駅の操車場にはまっ黒な煙がたちこめ、その間から紅い煙が噴き出している。

これは反革命分子がしきりに宣伝する多数の「百万雄師」ではあるまい？

馬のしっぽが揺れているような黒煙がたちのぼっている。長江大橋の南の陣地付近には白兵戦が繰りひろげられ、昔の黄鶴楼あとの前は一大戦場になってしまった。そこかしこに死傷者が倒れ、硝煙の臭いがたちこめ、

「林総司令の指示通りに飛行」

林立果も独立団を率いて空に飛び立ち、再び武漢へ向った。



大字報のはじまりは1966年5月、北京大学に貼りだされた党幹部批判だった。次いで6月、清華大学付属中学の紅衛兵が袁波、毛主席がそれを支持して、以後、文革の「新兵器」、大字報が威力をふるうことになった。写真は杭州市内の街頭に並べられた大字報。

とコマひとつコマ、まるで映画のようにまぶたに浮かんでくる……

激しい戦闘が蛇山地区で行われている頃、林立果はその上空をとんでいった。彼は攻撃もできない。また攻撃したいとも思わなかった。ただ傍観者のように上空から観察していたのだが、戦闘機は早すぎて下のくわしい状況ははっきり分らなかつた。

高度10000呎で武昌飛行場の上空を通過すると、飛行場周辺には混雑していた人の群れもすっかりなくなり、深緑色の戦闘機の小さな点が安全区にまで広がっていた。沿走路上の障害物が完全にとり除かれ、輸送機が一機、向い風を受けながらゆっくりと降り、安全に滑走に移っている。

去った。これから彼の父親が顎口まで飛び車艦に搭乗して陣頭指揮に当るのだ。林立果は一瞬、身ぶるいした。父の健康が気がかりなのか？ それとも誇らしく感じたからなのか？ あま

先発の輸送機が空挺部隊をのせて離陸すると、氣象通信員が青ざめた顔で湖北地区氣象台の

革命暴徒とたたかっているのだ。どうやら戦況は味方に有利に進んでいるらしい。低空飛行でぐるりと旋回して戻ろうとした時には、深緑色の空挺部隊の兵士たちは全員着地しおわり、

別の道をゆく一隊は先を争って蛇山を占領し、長江大橋の橋頭堡を突破して大橋の交通路を遮断し、漢陽からやってくる謀叛人たちの支援を阻止した。

光は彼の方を目がけてとんで来た。急いで機首を上げ空高く逃げ込んだ。そしていま市区や河面に上を飛びかっている団の各機に、低空飛行禁止の命令を出した。

方々に紅旗のひるがえっているのがはつきりと見えた。

天興州の河面に停泊していた駆逐艦は武漢関大原前のより広い河面に移動し、白い煙を砲口から絶えまなく吐き出している。武昌地区の沙湖一帯で、いく筋もの黒い煙があがった。

林立果は武昌の東湖の上空から珞珈山を回って沙湖に直行した。下の街では溢れた人たちが、津波のように工人文化宮へと押し流されていく。そのまっただ中にもうもうと黒煙があがった。舞い上る煙の中には肉片や、ちぎれた手足がとび散り、鮮血と泥がまじり合い、そしてたったいま失ったばかりの生命と、数知れぬ壮大な美しい理想も混じっているはずだ。

東南の空の涯からみるみるうちにふくれてきた雷雲は、空の半分をまっくろに覆った。雲の端に稲妻が走った黒雲は物凄い早さでふくれつづけ、長江を渡りまたたく間に武漢三鎮をすっぽりと覆いかくした。

車軸を流すような豪雨で視界は完全に遮断された。林立果は力いっぱい機首をあげると雲の中へ突っ込んだ。まるで夢の世界にるようにミルク色の濃い霧の中に浮かんでいる。稲妻が機体のすぐ傍で光った。眼の前にはただ一面に白いモヤモヤし

た、脱け出すことのできない物体が漂っている。前方はどうなっているんだろう？ レーダーも雷雲の中では役に立たぬ。輸送機とぶつかりはしないだろうか？ 団の僚機と衝突事故でも

わたしよ、入ってもいい？

ああ！ 林立果は両手で頭を抱えた。もう何も思い出さたくない。肉体ばかりか、精神も疲れていった。

微かに輸送機のような音が聞かえている……。突然ドアをノックする音がはつきりと響き、彼はおどろいて眼をさました。鍵をあけるとドアの外には嬉しそうな岳雷が立っていた。「林团长、夕食です。老荘が今日、寛橋からやって来ました。大問題は解決しました」

老荘は独立団の寛橋基地の炊事班長である。彼は昔、上海の華味飯店で腕を磨いたとかで、西洋料理の腕前は相当なものだ。昨晚と今日の昼は宿泊所の三流のコックが作った料理で、みんながあまりのまずさに眼をムいた。老荘が来てくれさえすれば、この問題は片付いたも同然だ。

食堂は賑やかな話し声でいっぱいだ。独立団の十一人のパイロットの外にも、食堂の正面入

おこしたら大変だ。ただの恐れともちがい、まるで死の近づいてくるのを待っているようだ。彼は眼をみひらいて死の訪れるのを待っていた。いまか、いまか……。

口の近くに二十人ばかり見知らぬ人が、~~あんな~~大きな丸テーブルを囲んでワイワイ、ガヤガヤとやっている。林立果は顔をしかめ、食堂の脇の入口のドアのところ立っただけのまま眺めていた。岳雷が近づいてささやいた。「北京と上海からやって来た民航機のパイロット達です。指揮部で彼等の宿舎をここに割当てたので、この食堂で食べているんです」

突はこの食堂は普段は大講堂なのだが、現在は九個の丸テーブルを置いてある。ステージに近い二つを独立団が使っている。こちらは老荘を呼んで特別に料理を作らせているが、大っぱらにワイワイやっている民航のパイロット連中は、この宿舎所の三流コックの作る料理を食べているのだから、彼らに文句をいうわけにもいかぬ。それに反乱事件も大体片づいたのだから、まもなく移動するだろう、誰がすすき好んでいつまでもこ

TBS東京★MBS大阪★CBC名古屋★RKB福岡★HBC北海道★TBC仙台★RCC広島★ほか全国ネット



TBS系 新番組ニュース

たった30

1500 km

芸術祭参加「うさぎ飛ぶ海」二時間ドラマ

金もなく、名声もなく、インテリでもない二人の男、ひょんなことから始まった異郷をさすらう珍道中。いつだってロマンと幻滅は道づれだ。そんな男のナマな旅姿が二時間のドラマになった。

うさぎ飛ぶ北の海へ——

うさぎ飛ぶ時化の日、9・9トンの美晴丸は根室の花咲港から出航した。岩田（高橋悦史）とその弟分藤取（藤岡弘）の二人の漁師も乗り組んで驚ろ。閉ざされた冷たい海で夜の操業はつづくが、思ったほどの水揚げはなく、船内はいらだつ。そんなある日、操業中ケガをした岩田はアメリカ沿岸警備隊の手で、アラスカ・シトカの病院に運ばれた。言葉も通じないまま手当てを受ける岩田の前にマーチン・光子（倍賞千恵子）と名乗る日本女性が現われた。光子は、アメリカ人と結婚してアラスカに来た。一児をもうけ



高橋悦史 藤岡弘

藤岡弘 高橋悦史

小説 林彪事件

今週の数字 七十八万台

日本自動車工業会がまとめた九月の四輪車生産台数は七十八万四千三百六十六台で、これまでの最高だった今年六月を約三万台上回り新記録となった。これは輸出が好調なうえに国内向けも前年並みの生産を維持したため。

な所にいるものか。
林立果は皆が空けておいてくれた席に腰をおろした。
独立団のバイロット連中は皆静かに腰かけて、老荘の手品をつかったようなうまい料理のくるのをじっと待っている。いつもは楽天家でおしゃべりの岳雷までが今日はいやにおとなしい。皆の気持は言わずともよくわかる。この戦闘は勝利のうちに終わったとはいえないもの、自分たちの兄弟姉妹をも殺した内戦である。光栄だなどと言えるものではない。

だが服務員が大皿に盛った料理を運んで来ると、静けさは一瞬にして破られた。腹をすかし
「俺は老荘と離れられなくなっちゃまったぞ」
「胃袋を破くなよ。もうちょっと少なめに取れたら。他にも居るんだから！」
「この満牛肉は老荘が杭州で煮込んだのだと思う。賭けてもいい。こんなに手早くできる筈なもの」
林立果も腹が空いたので菜葉肉捲を二つと玫瑰鶏腿を一つ取って、あつあつのマントウに添えて食べ始めた。
その時、不意に鈴を振るような笑い声が聞えた。どこかでよく聞いたことのある声だ！



北京を擁護派におさえられていた文革派にとって、上海は「根拠地」といってもいい都市で、1967年2月にはバリ・コムニオンにならった「上海人民公社」が成立した。写真は上海の繁華街を埋めつくした紅衛兵たち。

食堂の前半分を占めていたあの民航のバイロット達が、急にざわめき出した。まるで犬の群れに脂身の肉を投げあえた時のように。独立団の者達もつきつきに食べるのをやめ、振り返ってその方を見た。
林立果も思わず顔をあげた。途端に彼の胃がギョッと縮まった。彼女だ、彼女がなんとここにやって来たのだ！
彼女は何度も縫い直して身体の線にピッタリと合わせたカーキ色の軍服を着ている。黒くて濃いショートカットの頭に軍帽をアミダにかぶり、毛先を内側に軽くカールさせた髪型は、そのふっくらとした色白の顔をいっそうきわだててみせた。
彼女は大きく光る真珠のような歯を出して大声で笑いながら、ガラスのコップを目の前にかかげている。五、六人の若い民航のバイロット達が先を争ってそれぞれ瓶からビールをそそぐ。黄金色の液体が泡と混じって溢れ出し床にこぼれた。またひとしきり嬌声がつづいた……。
林立果は箸を置くと、低い声で唐力夫にいった。
「疲れた、寝るよ」すぐに席を離れ、くるりと横のドアから出ていった。
宿舎の二階の廊下は静まりかえっていた。電燈がクリーム色

で幸福だったが、二年前に夫をなくし、今は岩田のように入院して行く日本人漁師の世話をしている明るい女性だ。
安心して眠りこんだ岩田が目を見ますと、枕元に鷹取が立っていた。トラブルでシトカに緊急入港した船から上つて来たという。岩田は、それが密入団になることを説明し、鷹取を船に帰した。だが、鷹取は再び岩田のところへ帰ってきた。
「兄貴、船が出ちまった！」
このままでは光子がまきぜえになると思つた岩田は、置き手紙を残し、鷹取を連れて病院を脱走した。アンカレッジには岩田の知人で実業家の隈崎（丹波哲郎）がいる。何としても行かねば……こうして、アンカレッジまでの千五百キロをたつた30ドルしか持たずに、言葉も話せぬ二人の旅が始まった……。

(PR) TBS東京★MBS大阪★CBC名古屋★RKB福岡★MBC北海道★TBC仙台★RCC広島★ほか全国ネット



上・丹波哲郎
下・倍賞千恵子とマーチン・正子さん

が、ロケのエピソードをひろうと――
アンカレッジでは、早朝のクラブでの録画どりのこと。出番のはずの丹波がいない。表では、朝からアル中が横行するその地域の當で、店主が大出で酔っ払いの老エスキモーを追い払っている。スタッフ一同、何事かと店の外に出れば、エスキモー、「アイ・アム・アクター」と叫ぶことしきり。何ともみすばらしい丹波の扮装に店主は謝るやら、スタッフは笑うやら。
劇中人物は実在のモデルがあり、マーチン・正子さんが災名、シトカではリラックスするよう倍賞に終始気をつかっていう。根室市では十七年ぶりのロケに街中がわきかえり、高橋・藤岡の初体験の操業シーンも本物の漁師のリードよろしく、ダイナミックな映像になった。
芸術祭ドラマ部門にTBSが十年ぶりに参加する作品である。▼「うきさき飛ぶ海」11月7日
月曜よる9・02・10・55 全国TBS系ネット



いよいよとどろりした 小型乾式 電子複写機、コピスター900D。ミタの技術の結晶を、今、お届けします。(価格)498,200円

コピスター 900D

三田工業株式会社

東京	03(503)1801(代)	仙台	0222(92)3225(代)
大阪	011(862)2631(代)	福岡	092(44)2723(代)
名古屋	052(88)1531(代)	札幌	011(82)1171(代)
京都	075(76)1171(代)	仙台	022(44)2723(代)
広島	0822(61)3111(代)	仙台	022(44)2723(代)

の厚い壁と濃い茶色の床板にはの暗い影を落している。林立果はひどく疲れを感じ、ドアを押した。両開きの窓を外に向けてあけ放つと、しめり気を含んだ夏の夜風がさつと吹き込んで来た。

悪魔！ なんだってまた彼女と逢ってしまったんだ！

彼はテーブルの上をこぶしを固めて力いっぱい叩いた。空虚な音がこの静かな夜にこだまし、彼ははっと我に返って苦笑した。窓辺から離れ、軍服の上衣とYシャツを脱ぐと、浴室の灯りをつけ、浴槽の蛇口をひねった。

水道のうるさい音にまじって誰かドアをノックしている音がきこえる。

「誰か？」
「扉雷であります」

「牛乳を持って来ました。さき程はなぜ夕食を召しあがらなかったのですか？」この若者はその理由を聞きたい様子だった。

林立果は答えたくないのですがそのまま浴室へと返ると、手早く衣類を脱ぎ捨て浴槽の縁をまたいだ。

全身を湯舟に沈めじーっとしていると、身体中の緊張と疲れが体内からじわじわと滲み出て、温い湯の中に溶けていくようだ。それなのに胸のいらだちと何ともいえないぬ気だるさは逆に強まってきた。彼は蛇口をひねると、とシャワーを頭のとっぺんから浴びた。つめたい水が勢よく頭全体にかかり、思考力が少しずつ甦って来る。今日の出来事がすべて眼の前に浮かんできた。ああ！ 今日重要な歴史の一里塚だ。まとめと反省を

しつかりとやらねばならない。頭をタオルでゴシゴシふいて寝室へ戻ると、部屋はまっ暗で灯りもついていない。雷もそっと引き下つたらしく、大きなコップ一杯の牛乳が机の上に置いてあった。ちょうど咽喉が渴いていたので、その水のようにひえた牛乳を一気に飲み干すと、冷たい爽やかさが気持をキリりとさせた。雷の暖かい友情が胸の中にはのぼるとひろがった。彼はランニングシャツとスポン下を着てから日夜肌身離さず持ち歩いている黒い書類カバンを取り出すと、窓際の机の前に坐った。

カバンの中の茶色い表紙の日記帳を眼の前にひろげると、卓上スタンドの灯りをつけ、今日の感想と反省を書きはじめた。

『7月21日、武漢事件は今日で

一応終結した。

一、発生の原因は不明、中央はどのように陳再道を処分するか？

二、なんのために大軍区は敢えて武力で中央に反抗したのか？ その黒幕は？ 反革命はど うしてこんなに多いのか？

四、ジェット戦闘機は「内戦」には効果がない。

五、長距離用大型ヘリコプターを開発し、空挺部隊の降下方法を改善する必要がある。

六、空軍は政治事件を緊急に制圧する重要な力となったが、陸海軍は行動に時間がかかるので役に立たない。

林立果は、今日の出来事をいろいろと考え分析し、一心に今

後の対策に没頭していった。突然ドアを軽くノックする音がした。彼が振り返り、まだ何も応えぬうちに、ドアが静かにあいた。

「誰？」扉雷が部屋を出てから、彼は鍵をかけるのを忘れていた。しまった！ いつも身につけている護身用のピストルはいま枕の下にある。彼は稲妻のように椅子から立ち上った。

「わたしよ、入ってもいい？」
「いいながら彼女はもう入ろうとしている。この悪魔め！ 明るいキラキラしたつぶらな瞳、人を誘うような軽く開けた唇、しなをつくってドアによりかかりほほえんでいる。と思うまもなく、するりと身をくねらせて部屋に入ってくると、さり気なくドアを閉め、鍵をかけた。

(以下次号) 氷室鴻詠